

International Exchange

プラハ美術工芸大学訪問

富山大学芸術文化学部講師 松田 愛



プラハ美術工芸大学 (UMPRUM) の外観

2015年3月26・27日の二日間、高島圭史准教授とともに、本学部と学術交流協定を結ぶプラハ美術工芸大学を訪問した。プラハ美術工芸大学からは、2011年に、当時副学長をされていたスホメル博士 (Filip Suchomel)、また建築学科のペルツル教授 (Jiří Pelcl) をお招きし、芸術文化学部で「プラハフォーラム」が開催されている¹。2014年には、本学部の林暁教授がプラハでのワークショップ開催のために招聘されている。このように、両大学が築いてきた関係性を基盤に、学生の交換留学の活発化と充実化をはかるため、①芸術文化学部からの留学生が使用可能な学内施設や、教育等を調査すること、加えて②芸術文化学部紹介のためのポスター展示を実施することが、今回の主な目的であった。本報告は、高島准教授と訪問・調査した内容をまとめたものである。

プラハ美術工芸大学は、英語ではAAAD (Academy of Arts, Architecture and Design Prague) と表記されるが、プラハではUMPRUM (Vysoká škola uměleckoprůmyslová v Praze) の愛称で親しまれている。1885年に創立され、チェコ共和国内の芸術系国立大学の中で最も歴史のある大学である。ヴルタヴァ川のほとり、プラハ城へとつながるマーネスーフ橋のたもとに位置し、付近には国立・公立美術館、現代美術ギャラリー、音楽大、劇場、図書館などが立ち並び、立地・環境ともに優れている。建築・デザイン・美術・応用芸術・グラフィック・美学美術史の6学部があり、チェコの活字デザインやイラストレーション、ガラス芸術などを学ぶことができる。私達が訪問した際にも、日本からの交換留学として学部のガラス・スタジオで1名、外国人留学生のための大学院マスターコース「ヴィジュアル・アーツ」では3名の日本人留学生が勉強中であった²。

初日はスメタナ学長 (Jindřich Smetana)、ペルツル副学長への挨拶の後、国際交流課のベリノヴァ氏 (Lucie Bělinová) に、アトリエや講義室、図書室など、学内を案内していただいた。また、今回の訪問に際しては、以前、芸術文化学部で留学していた博士後期課程の大学院生、および修士課程の大学院生、また、上記日本からの

大学院留学生2人にも、UMPRUMでの研究や教育のことなど、様々な話を聴くことができた。

UMPRUMには4年制と6年制があり、ほとんどの学生が6年制であるという。学生数は、学部生、大学院生あわせて500人程である。上記6つの学部はさらに、23の学科に細分化され、各学科はスタジオと呼ばれている。スタジオは2名の指導教官によって運営され、学部1年生から博士課程の院生までが所属し、各自で作業を進めたり、皆で討論を行ったり、様々な方法で授業が進められる。ただし、美学美術史学部のロモヴァ先生 (Johanka Lomova) によれば、当学部はスタジオをもち、学生は制作について学ぶため、1セメスター (半期) の間、他学部のスタジオに所属する。あわせて古代から現代まで、伝統的な美術史教育を学び、美術史などの卒業論文を執筆することになる。当学部はまた、他学部の学生にも美術史、哲学、美学の基礎的な教育を行うという。

また、今回ドローイングの授業を見学撮影させてもらったが、ドローイング (人物デッサン) は全学部の基礎的な科目として設置され、様々な学部の学生が履修することのであった。このように、共通の基礎的教育を土台に、各学科による多様な専門教育が展開されていることがわかる。

課題内容はスタジオごとに異なるが、1セメスターに1回の授業成果展示を学内で行い、その際は、指導教官以外の教員による講評会が行われ、講評会とプレビューを含め、一週間の展示は学外にも一般公開される。また、年に一度の卒業制作展は、6月中旬、授業成果展示の後に、学内のアトリエ、教室および大学内に設置されたUMギャラリーなどを使って開催される。こちらも学外に一般公開され、多くの人々が見に訪れるという。もともとプラハの街中にはアートやデザインのギャラリーが多く、作品を買う人々も多いことから、学生達の意識も高く、学生は個人的にギャラリーなどと交渉し、制作活動のための環境を自発的に整えていくようである³。

UMPRUMはまた、学内にUMギャラリーという名のギャラリーをもち、学外からの申請も受けつけ、審査を



ドローイングの授業



イラストレーション・スタジオ

通った質の高い展示が行われている。私達の訪問時には、「UMBikes」というタイトルのもと、チェコ自転車のデザイナーや作り手達の仕事に光をあてた展示会が開催されていた。学生や卒業生の手になる自転車から、限定シリーズを扱う会社によってつくられた貴重なコレクターズアイテムに至るまで、自転車の美学的・技術的価値に着目すると同時に、地域の産業と市民の生活や社会との結びつきを見直そうという興味深い展示であった⁴。このような地域の産業と連携したアートやデザインのキュレーションが、大学を中心にどのように展開され、地域にどのような影響を与えているのかについては、今後の学術交流を進める上で、1つの重要なテーマとなるだろう。

今回の訪問では、芸術文化学部の学生の卒業制作作品や、本学部が地域と連携して毎年開催している「楽市 in さまのこ」、地域に密着した芸文ギャラリーの展示会など、本学部の様々な活動を紹介するポスター合わせて13枚を持参し、学生が行き来するUMPRUM学内の廊下に展示した。通りがかりの学生達が興味深そうにポスターに見入っていた。小さな規模ではあるが、この展示をきっかけに、富山大学芸術文化学部や日本に興味を持つ学生、また教員が増えてくれることを願いたい。

UMPRUMの周辺には、ナショナル・ギャラリー、市立美術館、科学技術博物館、劇場やギャラリーなどの文化施設、プラハ城や大聖堂、そのほかにも多くの教会が点在し、街中では音楽コンサートも頻繁に開かれている。

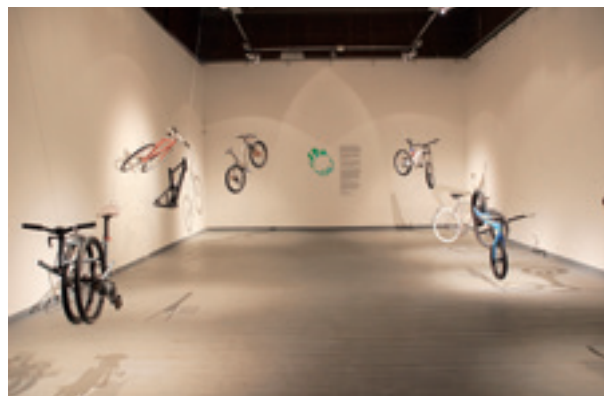


富山大学芸術文化学部紹介のためのポスター展示

近隣にはカレル大学があり、ヴルタヴァ川対岸には、プラハ芸術アカデミーやプラハ美術大学がある。このような知的・文化的環境が整う中、中欧の芸術文化を学ぶことはもちろん、プラハという歴史都市に現代の芸術文化がどのように融合し、関わっているのかを実際に肌で感じることは、本学部の学生にとって、また広く芸術文化を学ぶ者にとって、大きな意味をもつに違いない。

注

- 1 本フォーラムの詳細については、武山良三「プラハフォーラム—高岡から世界へ、地域連携・海外連携を考える」『富山大学 芸術文化学部紀要』第7巻、平成25年2月発行、pp.12-25を参照のこと。
- 2 イラストレーション・スタジオに2名、スーパーメディア・スタジオに1名が学んでいた。
- 3 実際にUMPRUMに交換留学したことのある、本学部の学生への聴き取りより。
- 4 本展のプレスリリースによると、「um」はチェコ語で「skill（手腕・腕前、技能・技術）」を意味し、技術的または芸術的「um/skill」が本展全体のライトモチーフになっているという。したがって、展示会タイトル「UMBikes」は、UMPRUMの学生達の主な交通手段である自転車を意味すると同時に、洗練された技術による製作も表している。



UMギャラリーでの展示会「UMBikes」